紀伊国に幸す時に、川島皇子の作らす歌

三四番

白波の　浜松が枝の　手向くさ　幾代までにか
年の経ぬらむ

勢能山を越ゆる時に、阿閉皇女の作らす歌

三五番

これやこの　大和にしては　我が恋ふる　紀路に
ありといふ　名に負ふ背の山